

捕鯨船団 女ドクター 南氷洋に行く

田村京子



集英社

著者 田村京子

1940年中国・長春生まれ。東邦大学医学部卒。
東邦大麻醉科助教授。スウェーデンのカロリン
スカ大に留学。都立駒込病院麻醉科医長を務め
た。1982年に北洋サケ・マス船団、1984年に南
氷洋捕鯨船団の船医となる。実績をかわれて
1985年6～7月、船員制度近代化実験船の調査
員を委託され、北米航路のコンテナ船に乗る。
著書「北洋船団 女ドクター航海記」(1985年集
英社刊)で34回日本エッセイスト・クラブ賞受賞。

捕鯨船団 女ドクター南氷洋に行く

一九八七年二月二〇日 第一刷発行
一九八八年一月三〇日 第二刷発行

定価 一、〇〇〇円

著者 田村京子

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二五—一〇

郵便番号 一〇—

出版部 (〇三) 二三〇—六一〇〇

電話 販売部 (〇三) 二三〇—六一七一

製作課 (〇三) 二三〇—六〇八〇

印刷所 中央精版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送り
ください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

本書の内容の一部または全部を無断で複製、複製、転載する
ことを禁じます。

© 1987 K. TAMURA Printed in Japan

ISBN4-08-775113-9 C0095

捕鯨船団はいよいよ南氷洋に入った。私が乗船している母船「第三日新丸」から白夜の海をともに航く“仲間”が見えた。一緒にがんばろうね、私はデッキの上から声にならない熱いエールをその船におくっていた。







▶揺れる、傾く、そして吸い込まれるように落ちる。船は荒れるシケの南氷洋をただまっしぐらに進む。男らしく、堂々と。

◀母船のブリッジに出てみた。横なぐりの烈風が頬を叩く。寒い、いや痛い。

▼故郷からの便りを運ぶ仲積船が遠くに見える。流氷に乗ったペンギンが不思議そうにその光景を眺めていた。この日の患者、初診再診あわせて32名。



南極大陸と卓状型氷山。南極海に浮かぶ氷山の数は一説によると20万個から30万個。大きいのは厚さ300メートル、長さ200キロメートルにも及ぶという。私はただ、ため息をつきながら、めずらしく静かで冷たい海に向けてシャッターを押した。





▶この日、はじめて私は母船をはなれ、キャッチャーボートに乗った。「だいじょうぶよ!」心配そうな母船に向けて、私は大きく手をあげた。



▼南極に冬の到来をつげるハスッ葉氷が見えはじめた。さあ、捕鯨も最後の追込み。患者もこれから激増するにちがいない、そう思うと私は医師としての真の使命を痛感した。





◀「ドクター、あんた、本当に強い星の下に生まれたんだよな。北洋はおろか、南氷洋まできて、しかもキャッチャーボートにまで乗ったんだもん」無精ヒゲの砲手がテレくさそうにそう言って、ほへんだ。

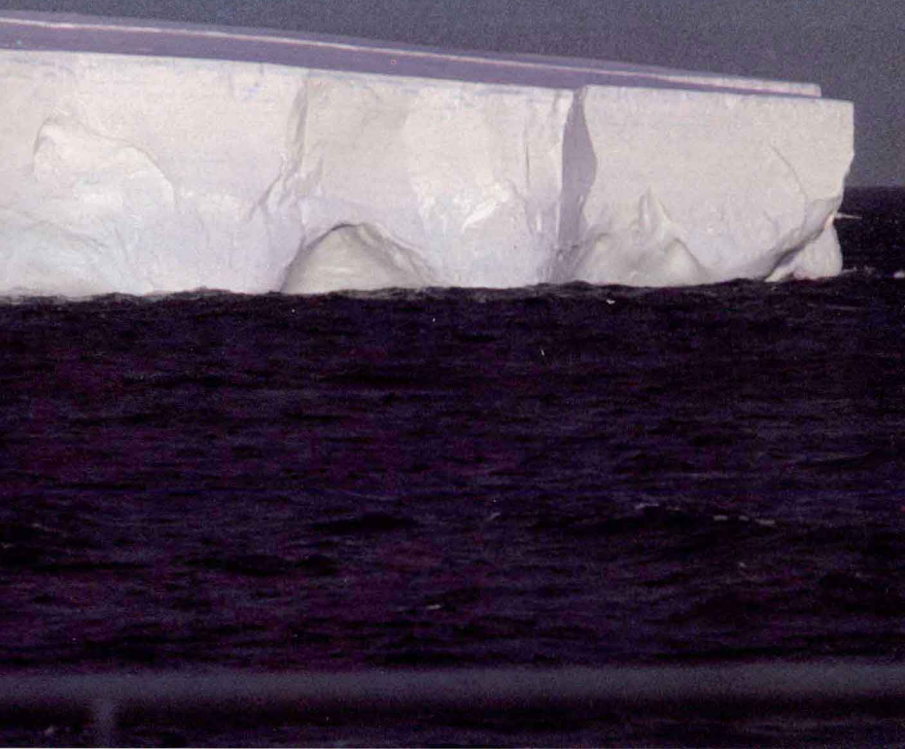
▼末期癌のため、緊急送還された船団員がいた。もう日本へ着いたのだろうか。彼の無念の思いを乗せて、「第三日新丸」は流氷の中を凜凜と進んでいった。

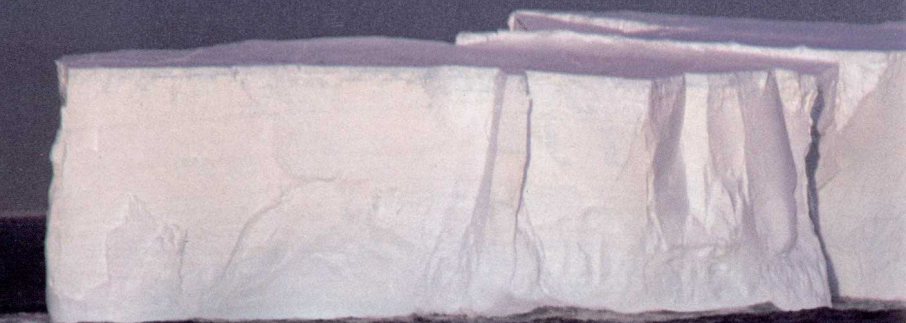






あつ、鯨。私は思わず大声をあげた。わが船
団の最大の獲物ミンク鯨が姿を見せた日。あ
まりの私の歓声に流氷の上のペンギンは驚き、
あわてて海に飛びおりた。





噂には聞いていた。でも、これほど美しく、雄大だとは思わなかった氷山の群れ。ある時は白夜に幻想のように浮かび、またある時は妖精のようにピンクに染まる。南極までやってきて、本当によかった。

これが氷山か。ヒマラヤを思わせる白き峰に
向けてシャッターを押す。「先生、いい写真が
撮れますか」機関部員のひとりがすがすがし
い笑顔で私に声をかけてくれた。





▶私は診療の合い間を見つけてはデッキに立って進んでいく母船の下の海の風景を見下していた。

◀ペンギンの夫婦が何かを語らっていたし、アザラシは久々の陽光をあび、流氷の上で昼寝をしていた。

▼ペンギンの群れを見るのも楽しかった。ふと家族のことを思った。
◀こうした流氷と冰山で織りなす南極の風景は私の心をなごませ、明日への勇気を与えてくれた。

